慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	鈴木諒一著 くらしの中の物価
Sub Title	
Author	佐藤, 保
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1966
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.59, No.12 (1966. 12) ,p.1492(128)-
JaLC DOI	10.14991/001.19661201-0128
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19661201-0128

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

高橋亀吉」、「最近の堀江理論」、「研究文献」というように問題を整理しているのも興味深い。以上、簡単にその内容について紹介を試みたが、要するに本書は、研究動向と問題点の整理とならんで、これに必要な主要な文献とを配列したきわめて詳細な文献的研究である。経済史、社会史にかんするすべての研究者が、一本備えておいても無駄ではない。きわめて便利な書物である。（広文社・昭和四一年六月刊・A5・六四八頁・一八〇〇円）

—飯田　鼎—

＊　＊　＊

鈴木諒一著

『くらしの中の物価』

最近物価問題はやかましく論ぜられ、学生の中にもこの問題をとりあげる人が多い。本書はこの問題についてできるだけ平易に、家庭の主婦と経済学者との対話という形で述べられている。四章からなるが（これを第一夜、第二夜というように書かれている）、一、家計の内容はどうしてきまるか、二、物価はどうなる、三、物価と賃金、四、物価指数とは、と分れている。結びのことばから若干引用してみると、中期経済計画によると、物価上昇の原因として、㈠、労働力不足による賃金の上昇が、生産性の上昇によってカバーされない場合が多いこと、㈡、生産性上昇の高い企業においてその成果が十分価格引下げに反映されず、一部に協定などによって価格競争の原則が貫かれていないこと、㈢、生産財産業には設備近代化のための投資がいまでも行われてきたが、農業、中小企業、流通部門など、消費に関連の深い部門の合理化のための投資が少なかったこと。㈣、消費者の立場から自由化の問題が検討されることが少なく、配慮が足りないこと。㈤、金融機関が預金以上の貸出しを行い、企業も借入れ金によって経営をしている場合が多く、このために出ていった資金がインフレの要因になっていること、このような事実認識に対して、その対策が考えられるが、結局成長率を下げることによって物価上昇をおさえようと考える。しかしそうすれば不景気になることは避けられない。そこで極端な不景気を起こさずに、しかも消費者物価を上げずにすむような妙案があるとすれば、それは貯蓄をふやすということである。貯蓄することこそ物価を安定させる道といえる。それでは貯蓄をふやすにはどうすればよいかというと、下がった株価を正常な状態に戻すこと。貯蓄に対する税制上の優遇措置等が考えられる。これは一見高額所得者だけを優遇するように見えるが、物価上昇が鈍化すれば恩恵は一般国民に及ぶことになる。このような論旨に反対の意見もでてこようが、著書の豊富な経済学の知識をもって平易に説かれた本書は広く読まれてよいものと考えられる。（東洋経済新報社・昭和四〇年七月刊・B6・二一〇頁・三九〇円）

—佐藤　保—

飯田鼎君学位授与報告

報告番号　乙第一七九号
学位の種類　経済学博士
授与の年月日　昭和四一年一〇月五日
学位論文題名　「マルクス主義における革命と改良」

内容の要旨

「マルクス主義における革命と改良
——第一インターナショナルにおける
階級・体制および民族の問題」一九六六年　飯田　鼎

本論文は一八六四年ロンドンにおいて創立された第一インターナショナル（国際労働者協会）におけるマルクスおよびエンゲルスの活動を通してマルクス主義の革命理論の特徴を明らかにしたものである。

この論文の中心的課題は、一八四八年の革命の時点から一八六〇年代に至るマルクス主義の革命理論の深化を、革命的視点と改良的視点の統一的把握と観点から追求するとともに、その革命理論の本質を労働者階級の闘争を媒介とする社会主義運動と民族開放闘争との関連において、弁証法的な理解としてとらえ、それがいかにして形成されたかを歴史的に且つ理論的に明らかにしたものである。つぎのような内容から成る。

序　章　一九世紀ヨーロッパ労働運動におけるマルクス主義の役割——問題の設定
第一章　一八四八年の革命における労働者階級とマルクス主義の形成
第二章　インターナショナルへの途
第三章　第一インターナショナルの成立
第四章　インターナショナルの展開——その発展と矛盾
終　章　残された問題——修正主義との闘い

審査報告要旨

本書は、一八四〇年代から一八八〇年代に及ぶマルクスおよびエンゲルスの活動において、彼らの革命観が、イギリスを中心とするヨーロッパ労働運動の展開の過程を背景にしてどのように具体化され、発展せしめられたか、経済学者あるいは哲学者としてのマルクスとエンゲルスよりはむしろ、革命家としての彼らの苦闘と前進、しかもそのなかでのその革命理論の陶冶の問題に焦点をしぼったものである。それゆえ著者は、「はしがき」のなかでつぎのように強調している。「それゆえ、マルクスの革命理論の本質的理解こそ、わたくしが本書において試みたものであって、マルクス主義の革命理論の精髄を、マルクスとエンゲルスという二人の巨匠の行動を通